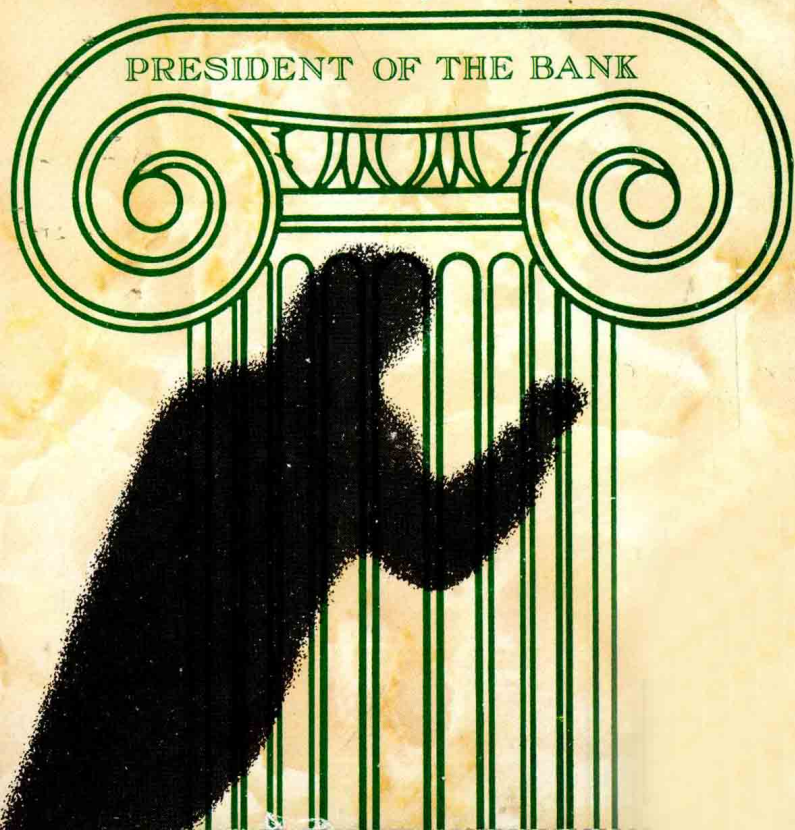


山田智彦

銀行頭取

下

PRESIDENT OF THE BANK



ぎんこうとうどり
銀行頭取(下)

やま だともひこ
山田智彦

© Tomohiko Yamada 1993



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1993年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185467-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

銀行頭取 (下)

山田智彦

講談社

目次 下巻

それぞれの事情 7

父と子 66

作戦の誤り 141

果敢な挑戦 214

報酬 278

生みの苦しみ 321

終章 376

解説 中田浩二 383

単行本は一九九〇年八月 小社刊

銀行頭取

下卷

単行本は一九九〇年八月 小社刊

それぞれの事情

水城多加代、バンコク、この二つの単語は、高千穂雷造に厭な印象を与えた。理由ははっきりしないが、あとになって、何か、大きな問題に発展しそうな予感が襲いかかってきた。前方に、得体の知れない黒雲を見たような気がしたのだ。

どうやら、谷口孝雄にも同じような思いがあるらしい。

「二人の専務には内密ですが、ほんとうは伏見くんをバンコクへ派遣したいのです」と彼は本音を口にした。

「どうしてかね？」

高千穂はあえて訊いた。

「あの男には独特の勘がありました」

「それは、わたしにだって、わかっていますよ」

「獲物を追いつめた時の勘です」

と谷口は強調した。

「それで」

と高千穂は先を促す。

「彼がバンコクへ行きたいとしきりにせがむのです。わたくしとしては、時間さえあれば、伏見をまずタイへやりたい。しかし、銀行にとっても、わたくしにとっても、頭取問題の方が重要です。そこで、アマゾンへ行かせることにしました」

「ほかに、伏見成三の代りが務まるような男はいないのかね？」

「おりません」

即座に、谷口は答えた。

「探したのかね？」

「もちろんです。やっと伏見の半分程度の者なら、本部に数人おります」

「では、二人にしてタッグチームを作ってはどうかね？」

「ダメですね。かえってマイナスになります。伏見の帰りを待った方がよいと思います。その間にバンコクで何も起こらなければいいのですが」

「うむ。では、そう祈るほかはないのか？」

「その通りです」

「やれやれ、いったい、きみは何を言いたいんだ」

「この事実を、お耳に入れておきたかったです」

谷口はそう言うと、立ち上がって一礼した。

「では訊くが」

高千穂も席を立った。

「きみがそれほど頼りにしている伏見くんを、あえてアマゾンへやるからには、『頭取レース』に自信を持っているだけではなく、必ず勝つつもりだね？」

「はい、勝てると思っております」

確信に満ちた言葉が返ってきた。

「……………」

高千穂は無言のまま、谷口を睨んだ。

副頭取室を出てきた稲垣と住田は、それぞれの個室に引きあげた。

稲垣はさっそく電話を取りあげて、福本雅男を呼び出した。

「明日の夜だが、大丈夫だろうね？」

いきなり言った。

「大丈夫って、何が？」

「きまっているじゃないか？ 先方の都合だよ」

「先方って、伊万里教授のご都合かね？」

福本の落着いた声が返ってきた。

「そうだよ」

「いまだに、都合がわるいという連絡が来たわけじゃないから、いいんでしょう。それとも何

か、稲垣さんの方に知らせがあったの」

「いや、ない」

「落着いて下さいよ。とにかく、明日の夜になれば、先生の口からはっきり返事が聞けるんだから」

「それはわかってる。しかし、もし、断われたら、どうしよう？」

稲垣の声はうわずっていた。

「一度断われたら、はい、そうですかと引下がるのかね？」

「そんな気はない。あくまでもくい下がって」と強調する。

「それじゃあ、気にすることはないね。まだ第一ラウンドだよ」

「そ、そうなんだ」

「しっかりして下さいよ。主な交渉相手はぼくじゃない。あなたですよ。ここは落着いて、堂々といつてほしいね」

「うむ、わかった」

自らに言いきかせて、稲垣は受話器を置いた。

明日の夜、長男の伊万里源一を赤坂の料亭に招待したのだ。東大の歴史学の教授で、何冊かの著書も出している。稲垣洋太郎は一人で行く自信がなく、気心の知れた福本に応援を頼んだ。

高千穂も谷口も、まだ頭取候補者に会うどころか、接触するための旅の準備に入ったところ

だ。しかも、二人共代打を送るのである。それに、住田もまだ次男に会えないでいる。文字通り、稲垣が一番乗りなのだ。

その事実を意識しすぎて、つい興奮した。とくに、いましがた、出張うんぬんを耳にして、心がおごり高ぶってしまった。なにしろ、伊万里源一氏は伊万里家の跡取りであり、長男なのだ。くじ運わるく、最後に引当てたとはいえ、真っ先に会えることになったのも何かの因縁であろう。幸先はよし、手ごたえは十分と判断して、部屋に帰って来ると、舞い上がった心臓を押さえつけるすべがなくなった。あぐくに、電話機に手を伸べたのだ。

一方、住田肇は三日後の夜、虎ノ門にある伊万里病院を訪ねることになっていた。

次男の伊万里啓二は、開業医として成功している。夫人も医師で、かつての慶応医学部時代の同級生である。はじめは慶応病院に勤めたものの、十年後に独立した。

八階建のビルをそっくり所有していた。一階から三階までを診療に使用し、四、五階は貸事務所、六、七階はマンションとして賃貸し、八階の全フロアーを自分たちの住居に使うという豪華さである。夫婦共に医学博士で、子供はいなかった。

夜九時に、三階の院長室までお越し下さい。秘書がそう伝えてきた。

自分の椅子に腰を下し、しばらく考え込んでいた住田も、結局、受話器を取り上げた。

「崎村さん、三日後の夜、夕方から時間を空けておいて下さい」
そう頼み込んだ。

「例の件ですか？」

「その通り、やはり、いっしょに行っていただこうと思つてね」

「たしか、一人の方がよいと、自信たっぷりでしたね」

大蔵省の古参課長はやんわり言つた。

「いや、少し、考えが変わつた。これからの大蔵省の方針など、横でしゃべってくれると楽だと思つてね。どうせ、一筋ナワではないか。腕がよくて、金持ちで、評判がよい。おまけに四十七歳の若さだ。奥さんも美人で、頭のよい女医ときている」

「弱点がなさすぎるね」

「表面から見た限りでは、とりつく所がないよ」

「裏から見れば、何か出るかね？」

「それは、わからない。しかし、どんな人間にも欠点はあるし、弱点もある」

住田は確信を持って言いきつた。

「弱点を突くつもりかね？」

「もちろん、場合によつては。すでに調査をはじめていますよ」

「恐しい男だね。敵にしないでよかつたよ」

「そう言つて下さるのは、あなただけです。せめて、うちのオーナーの富美江夫人か、おたくの有浦局長さんあたりが、認識を新たにして下さればねえ」

口調がぐちっぽくなつた。

「いずれ、思い知るでしょう」

と崎村は明るく応じた。

「早い時期に、そうなってほしいところですねあ」

「お互いに、いまはじつと我慢がかんじんですよ」

「その通り、今夜、会いますか？」

「いいですねえ」

崎村は手帳を見ながら、^{つぶや}呟いた。

次の日一日で、準備はかなり進んだ。

伏見成三は、もはや水城多加代やバンコクにかかわりあっているわけにはいかず、その方面は刑事の刈谷進一に任せることにした。不本意ではあるが、そうするほかなかった。ただ、そうと決れば、伏見はもうよくよくよしない。もともと、後戻りをいさぎよしとせず、前方にのみ突き進むのが好きな男だ。今度も、彼の性格がプラスに働いた。いまや、伏見はアマゾン事情の調査に夢中になっている。この点だけをとらえても、谷口孝雄の人選に誤りはなかった。

望月竹盛も迅速に動いた。彼は日通航空の銀座支店長に会って、伊万里頭取以下三人分の渡航手続と、ギリシヤのホテルの手配を頼んだ。さいわい、三人共バスポートを取得していて、まだ期限が切れていない。ギリシヤはビザ不要なので、その日のうちにホテルと飛行機を押さえた。

ホテルはアテネ最高級の五つ星ホテル、グランド・ブルターニュのスイートルームと隣り合わせた普通の部屋を二つ予約した。クレタ島でも最もよいアストリアホテルを取った。

飛行機は日本航空を選んだ。伊万里頭取の病状を考えると、万一の場合、言葉の心配がなく、気心の知れている日航以外は考えられなかった。当初、望月はファーストクラス一席とビジネスクラス二席を考えたが、高千穂副頭取の助言で、三人ともファーストクラスに変えた。

「二人共、頭取の近くにいてあげて下さい。金額の問題じゃありませんよ。今回の旅行はすべて頭取の便宜を第一にすること。そのためには、何事も、贅沢に徹した方がいいでしょう」

高千穂はそう言った。

アンカレッジ経由の北廻りか、ロンドン、パリ、フランクフルトへの直行便の方がヨーロッパ入りは早い、何処かで一度乗り換えねばならない。結局、南廻りの直行便を選んだ。これだと乗り換えなしで、アテネに着く。

日通航空の銀座支店を出ると、望月はその足で田園調布に向かった。富美江夫人に、くわしく報告するためであった。

夫人は先日、高千穂以下の首脳陣を集めて「頭取レース」のスタートを告げてからは、のんびりした毎日を送っていた。芝居見物や絵の個展めぐり、熱帯植物の手入れに余念がない。

自分がしかけたレースに満足している。あとは黙っていて、結果を待てばよい。先に、大いなる愉しみが待っているのであるから、毎日がすばらしい。これで、息子の一人が銀行の跡継ぎになってくれれば、申し分なかった。それも、あと約一カ月の辛抱であった。

その頃、バンコクでは、水城多加代が新しい生活に意欲を燃やしはじめていた。

すでに、黒沼弥一郎からの連絡が絶えて久しい。もはや、黒沼など当てにするのはやめようと心に誓ってから、いくらか気が楽になった。とはいえ、長年勤めた銀行の金を詐取したのである。時折、犯した罪の大きさに駄が震えた。夜中に眼が覚めて思わず叫び出したこともあった。

黒沼への恨みが棲みつき、いくら追い払っても、どうにもならない日々が続いた。そういう時、多加代は己の感情をもてあまして、すぐに泣いた。男を恨んで泣いたのである。つらい日々が続いた。

が、人間は環境の動物だ。

熱帯のすさまじい陽光にも、四十度近い湿気を含んだ高温にも、香辛料のきいた食べ物にも、少しずつ、彼女は馴れた。それにしても、ワンチャイ・ヨントラキットの存在は大きかった。この褐色の肌のタイ青年は、親身になって多加代の面倒をみた。彼は最初から好意的であったが、彼女の不安定な身の上がはつきりするにつれて、親切さが増した。同情が、ごく自然に恋に変わったのであろうか？

パタヤ・ビーチへの二泊三日の旅が、かなり決定的な要素になった。最初の夜、それぞれの部屋で眠った二人は、次の夜、同じ部屋で夜明けを迎えた。

事態は変わった。

眼覚めると、世界が変化していた。頭の中にたまっていた灰色の霧が消えて無くなり、駄が軽くなっている。肢体が細くしなやかになって、数センチ以上も伸びたような気がした。そのく